

PRESS RELEASE

2017/11/8

2018/1/17 改訂

開館 40 周年記念展

「トラベラー：まだ見ぬ地を踏むために」

2018 年 1 月 21 日（日） - 5 月 6 日（日）

国立国際美術館

## PRESS RELEASE

開館40周年記念展「トラベラー：まだ見ぬ地を踏むために」

### 開催情報

展覧会名 開館 40 周年記念展「トラベラー：まだ見ぬ地を踏むために」  
英語名 Travelers: Stepping into the Unknown  
会 期 2018 年 1 月 21 日（日）— 5 月 6 日（日）  
会 場 国立国際美術館（〒530-0005 大阪市北区中之島 4-2-55）  
開館時間 10：00 — 17：00 ※金曜・土曜は 20：00 まで（入場は閉館の 30 分前まで）  
休 館 日 月曜日（ただし、2 月 12 日（月・休）は開館し、13 日（火）は休館。4 月 30 日（月・休）は開館）  
主 催 国立国際美術館  
協 賛 安藤忠雄文化財団、ダイキン工業現代美術振興財団  
助 成 アダム・ミツキエヴィッチ・インスティテュート  
観 覧 料 一般 1,200 円（900 円） 大学生 800 円（550 円）  
（ ）内は 20 名以上の団体料金 高校生以下・18 歳未満無料  
心身に障がいのある方とその付添者 1 名無料（証明できるものをご提示願います）  
夜間割引料金（対象時間：金曜・土曜の 17：00—20：00）一般 1,000 円 大学生 700 円  
リピーター割引料金：一般 600 円 大学生 400 円（本展使用済み観覧券をお持ちいただくと、2 回目以降は特別料金でご覧いただけます）  
無料観覧日 2018 年 3 月 31 日（土）

展覧会特設サイト <http://www.nmao40.com/>

次回展 2018 年 5 月 26 日（土）— 7 月 1 日（日）  
「視覚芸術百態：19 のテーマによる 196 の作品」

一般のお客様からのお問い合わせ先 国立国際美術館 TEL: 06-6447-4680（代表）  
URL <http://www.nmao.go.jp/>

### 交通アクセス

京阪電車中之島線「渡辺橋駅」（2 番出口）から南西へ徒歩約 5 分  
地下鉄四つ橋線「肥後橋駅」（3 番出口）から西へ徒歩約 10 分  
JR 大阪環状線「福島駅」、東西線「新福島駅」（2 番出口）から南へ徒歩約 10 分  
阪神電車「福島駅」（3 番出口）から南へ徒歩約 10 分  
市バス「大阪駅前」から、53 号・75 号系統で、「田蓑橋」下車、南西へ徒歩約 3 分  
当館には専用駐車場はありません。周辺の駐車場の数に限りがあるため、ご来館は電車・バス等をご利用ください。

## 開催趣旨

国立国際美術館は1977年に開館し、本年度、開館40周年を迎えました。これを記念する特別展「トラベラー：まだ見ぬ地を踏むために」を開催します。

本展は、所蔵作品に新作のコミッションワークなどを組み合わせ、またパフォーマンスを展示室で継続的に展開するなどの新しい試みにあふれた展覧会です。この展覧会を目撃する人全てが、時間と空間を越えた「トラベラー」となり、縦横無尽に想像力をめぐらせることのできるまたとない機会となるでしょう。

国立国際美術館は、1970年に大阪で開催された日本万国博覧会の際に建設された万国博美術館を活用し、国内外の現代美術を中心とした作品を収集、保管、展示し、関連する調査研究及び事業を行うことを目的として開館したわが国4番目の国立美術館です。現在までに約8,000点の作品を収集し、260を超える特別展・企画展を実施し、それとともに教育普及活動や関連イベントを行ってきました。

40年という時の積み重ね。この時間の流れには、私たちの歴史や経験、記憶が蓄積されています。2004年、建物の老朽化と美術館の新たな展開のため、当館は万博記念公園から中之島へと移転しました。いま、この場所で当館を支えているのは、美術館のそばを流れる大川がもたらした堆積土です。私たちがいる「今、この場所」の足元深くには、表層からは見ること、知ることのできない事象が確かに存在しています。中之島エリアには、例えば江戸時代には蔵屋敷が並び、様々な物資が行き交う賑やかな場所であり、その後、大阪大学の医学部・理学部なども存在していました。このような歴史的な地で活動しているのが国立国際美術館です。

美術館がひとつの展覧会を終え、次の展覧会の出品作品を展示室に招き入れる前、まっさらの展示空間「ホワイトキューブ」がつかの間たち現れます。しかし、そうしたニュートラルな空間にさえ、おびただしい数の作品が展示された痕跡、鑑賞者の心に湧き起こったさまざまな感情、美術館にまつわるあらゆる記憶が不可視のままにそこに堆積しているのです。

大阪万博という戦後の日本におけるひとつの際立った文脈を内包し、これまで起こったあらゆる事象を礎にして、国立国際美術館はさらなる展開を遂げようとしています。

全館を会場に、二部構成となる本展では、第一部を「The Multilayered Sea：多層の海」と題して、時間や歴史、記憶という多層化したレイヤーから私たちの社会の姿を浮かび上がらせる作家の作品を展示します。当館にゆかりの深い収蔵作品、それらにつながりをもつ現代作家の作品が交互に現れることで、時や場所を横断する対話に耳を傾けていただけることでしょう。

また第二部では「Catch the Moment：時をとらえる」と題して、これから積み重ねていく美術

館の未来の可能性を探ります。作家の表現様式は時代を経て多岐にわたるようになり、いわゆる伝統的な絵画、彫刻などから、インスタレーション、映像など、かつての美術館ではあまり見受けられなかったスタイルの作品がよく見られるようになりました。そうした状況下、収集や展覧会の開催などに、美術館はいかに対応すべきなのでしょう。本展では、パフォーマンス作品における過去の記録、またライブアートとしての展示から、その可能性を探ります。

時に「美の墓場」のアレゴリーで語られる美術館は、絵画や彫刻など、今日では「静的」とさえ言える性質の作品を、可能な限りオリジナルのまま留めて保存・公開する場を理想としてきました。この意味において、パフォーマンスをはじめとする時間的な展開を伴った作品形態は、そうした美術館の性質になじまないため、たとえ美術史上の重要性を認められた作品であっても、収蔵庫での居場所を見つけ難いものでした。しかし、そうした表現がより普遍的なものとなった今日、これまでと同様の扱いを続けるという選択は美術館と鑑賞者にとって大きな損失を意味します。いまや美術館は、そうした新しい表現に積極的に取り組み、芸術にまつわるさまざまな実践をより広く、また深く検証すべき地点にいるのです。

さらなる高みを目指して新たなる表現を探求する作家たち、そうした作家の表現の変容にともない新たな美術館像を模索するキュレーターをはじめとする美術館関係者たち、またその美術館という場で作品や作家との出会いを楽しむ鑑賞者たち。それぞれが「トラベラー」となって、次なる歩みを踏み出すために深慮する場の創出となれば幸いです。

## 本展のみどころ

- 国立国際美術館の全館を用いた、かつてない規模の展覧会です。

地下2階、3階の展示室のみならず、地下1階エレベータ前の廊下など、全館が展示スペースです。

- 出品作品のジャンルも様々。会期中を通じて行うパフォーマンス作品もあります。

絵画や彫刻などに加えて、写真や映像、そして美術の流れの中ではまだ新しい表現のパフォーマンス作品も出品。美術館の展覧会では写真や映像による記録として展示される場合も多いですが、会期中通してご覧いただけるもの、鑑賞者が参加可能なパフォーマンスも出品します。

- 収蔵品とのコミッションなど新作多数。

40年に及ぶ美術館の活動には約8,000点もの作品を収集し保存するという重要なものが

開館40周年記念展「トラベラー：まだ見ぬ地を踏むために」

あります。これらのコレクションにインスピレーションを得たコミッションワークが展示されます。カリン・ザンダーは、収蔵作家たちに自身の作品や作家活動を「音」で表現してもらい、展示室で「見せる」作品を展示予定です。またピピロッティ・リストは、当館が開館時に制作を委嘱した高松次郎の《影》（1977年）の上に映像を投影。思いがけないイメージの重なりが新しい世界を作り出し、2人の優れたアーティストの世界が、積み重なる「光と影」のレイヤーの中から立ち上がります。

○ 幻のロバート・ラウシェンバーグ作品《至点》を展示。

当館のコレクションであるロバート・ラウシェンバーグによる《至点》（1968年）は、第4回ドクメンタ（1968年に開催）に出品された作品です。78年に当館が収集した後、中之島に移転するまでに展示されたことはあるものの、機械的な脆弱性ゆえ、そのコンディションは十全なものではありませんでした。今回、大規模な修復を経て、再び展示されます。

エンジニアの協力を得て制作された本作は、シルクスクリーンで刷られたアクリルパネルが、自動ドアとして開閉し、また床と天井には照明がついています。観客のインタラクティブな動きが加わることで、作品にも新たな見方が加わります。



ロバート・ラウシェンバーグ《至点》1968年 国立国際美術館蔵 © Robert Rauschenberg Foundation  
提供：NTT InterCommunication Center [ICC]

## 出品作家

ピピロッティ・リスト、高松次郎\*、ジャネット・カーディフ&ジョージ・ビュレス・ミラー、  
ジョアン・ミロ\*、ヘンリー・ムア\*、アレクサンダー・コールダー\*、ペーター・フィッシュリ  
ダヴィッド・ヴァイス、ロバート・ラウシェンバーグ\*、カリン・ザンダー、畠山直哉\*、  
米田知子\*、藤井光、大竹伸朗、ジェイ・チュン&キュウ・タケキ・マエダ、テリーサ・ハバード  
／アレクサンダー・ビルヒラー、アルベルト・ジャコメッティ\*、安齊重男\*、  
ボリス・ミハイロフ\*、許家維 (シュウ・ジャウェイ)、小泉明郎\*、シアスター・ゲイツ、  
ヤン・ヴォー、須田悦弘\*、ナイリー・バグラミアン、ティノ・セーガル、  
アローラ&カルサディーラ、マリーナ・アブラモヴィッチ、ロバート・スミッソン\*、  
ポール・マッカーシー\*、ヴィト・アコンチ\*、植松奎二、白髪一雄\*、工藤哲巳\*、  
塩見允枝子 (千枝子) \*、榎忠、篠原有司男\*、彦坂尚嘉、森村泰昌\*、村上三郎\*、塩田千春、  
笹本晃、ヒーメン・チョン、関川航平、ロベルト・クシミロフスキ、楊嘉輝 (ヤン・サムソン)  
\*は当館コレクション

PRESS RELEASE

開館40周年記念展「トラベラー：まだ見ぬ地を踏むために」

パフォーマンス いずれも地下2階展示室で開催、参加無料（要観覧券）

- ・アローラ&カルサディーラ《Lifespan》2014年（国立国際美術館蔵）

開館日は毎日開催

平日：14：00～

土日祝日及び振替休日（2月12日、4月30日）：11：00～、15：00～（いずれも約15分間）

※混み合った場合はご覧いただけないことがあります。



アローラ&カルサディーラ《Lifespan》2014年 国立国際美術館蔵 © Allora & Calzadilla; Courtesy Lisson Gallery

- ・ロベルト・クシミロフスキ《Vol/frame》2018年（作家蔵）、作家によるパフォーマンス

1月21日 [日] 10：00～17：00

- ・笹本晃《Yield Point（降伏点）》2017年（作家蔵）、作家によるパフォーマンス

1月21日 [日]、3月17日 [土]、18日 [日] いずれも14：00～（約20分間）

- ・ヒーメン・チョン《ショート・パフォーマンス・ストーリー》2018年（作家蔵）

予約制。実施日時及び予約の方法はホームページをご確認ください。

本作は、インストラクターと参加者のやりとりからなるパフォーマンスで、中心となるのは作家が本展のために書き下ろした短編小説です。参加者は、インストラクターから口頭でこの小説を学び、全て暗記するまでその場を去ることはできません。

小説はいかなるかたちでも公表されることはなく、インストラクターと参加者のみが知りえるものです。

小説は英語で書かれていますが、日本の参加者のために日本語に翻訳されています。

PRESS RELEASE

開館40周年記念展「トラベラー：まだ見ぬ地を踏むために」

関連イベント 参加無料、ギャラリー・トークのみ要観覧券。

[アーティスト・トーク]

1月21日 [日] 第1部 [11:30~13:00]

第2部 [15:30~17:00]

講師

第1部

ピピロッチェ・リスト、ジョージ・ビュレス・ミラー、カリン・ザンダー、藤井光、大竹伸朗、  
キュウ・タケキ・マエダ、アレクサンダー・ビルヒラー、許家維（シュウ・ジャウエイ）  
（いずれも本展出品作家）

第2部

須田悦弘、塩見允枝子（千枝子）、植松奎二、関川航平ほか  
（いずれも本展出品作家）

会場：地下1階講堂

第1部は英日通訳あり、先着110名、第1部・第2部入れ替え制、当日10:00より各部の整理券を配布

---

2月2日（金）18:30~

講師：キュウ・タケキ・マエダ（本展出品作家）

会場：地下1階講堂

先着130名

---

4月21日（土）

講師：ヒーメン・チョン（本展出品作家）

会場：地下1階講堂

英日通訳あり、先着130名、当日10:00より整理券配布

---



## PRESS RELEASE

### 開館40周年記念展「トラベラー：まだ見ぬ地を踏むために」

#### [特別対談]

3月3日（土）14：00～

講師：萩原弘子（大阪府立大学名誉教授）、藤井光（本展出品作家）

会場：地下1階講堂

先着130名、当日10：00より整理券配布

#### [特別講演会]「まだ見ぬ存在：パフォーマンス・アートにおける法律（仮）」2018年5月に開催予定

講師：アラナ・クシュニール（キュレーター／法律家、オーストラリア）

協力：オーストラリア大使館

#### [ギャラリー・トーク]

1月26日 [金] 19：00～、2月17日 [土]・3月10日 [土] 14：00～

会場：国立国際美術館 地下3階展示室

当日、開始30分前よりワイヤレス受信機を貸し出します（先着90名）

#### [ワークショップ]

4月14日 [土]、15日 [日] 講師：関川航平（本展出品作家）

#### [40周年記念びじゅつあーすぺしゃる]「40の物語を発見する旅」

3月31日 [土] 受付時間：10：30～17：00（プログラムは18：30まで開催）

パフォーマンス及び関連イベントの日時・内容は変更される場合があります。

詳細が決まり次第、ホームページなどでお知らせします。

#### 広報に関するお問い合わせ先

国立国際美術館 学芸課 広報担当 冬木明里

E-mail: kouhou@nmao.go.jp TEL: 06-6447-4671(直通) FAX: 06-6447-4698(学芸課)

#### 展覧会担当

植松由佳（当館主任研究員）

橋本 梓（当館主任研究員）

林 寿美（当館客員研究員）

## 開館 40 年を迎えて——国立国際美術館のこれまでとこれから

### 国立国際美術館の誕生

国立国際美術館は、1977年10月15日、万博記念公園内に開館しました。1970年に同地で開催された日本万国博覧会の一部として建築された万国博美術館（川島清設計）を整備して出発しています。

国立国際美術館の設立目的にこうあります。「日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために必要な美術作品その他の資料を収集し、保管して、公衆の観覧に供し、これらに関連する調査研究および事業をおこなう」。こうした大きな目標に向かって、まず自らの足元を検証するために、開館記念に「日本の美、その色とかたち」展が企画されました。縄文時代の土偶、平安時代の絵巻や仏画から現存する作家たちの絵画彫刻まで、時代もジャンルも広範に亘る展覧会で、美術館のこれからの活動の場を探ることを目指しました。

1970年の万国博美術館設立当初に謳われた「東洋を縦軸に、世界を横軸にして、歴史的な美術、さらに現代の美術活動を世界的視野でとらえ、今後の動向を示唆する」との趣旨は、開館記念展に見るように、当館の活動にも影を投げています。しかし実際に日々の活動を積み上げるなかで、時代の変化を探り進むべき方向を感知する美術館の眼は養われます。そしてそれを基盤にして時代と社会の要請に呼応する新たな活動がゆっくりと組み上げられていきます。

美術館を取り巻く時代と社会状況のなかで舵取りをしながら国立国際美術館は、日本と世界、現代と歴史をつねに視野に入れながら、展覧会活動とコレクション作りを進めていきました。「現代の作家展」、「近作展」など日本の作家たちをシリーズや単独で取り上げる一方、G・シーガル、A・ウォーホル、J・ボイス、F・ステラ、R・ラウシェンバーグ等の海外の現存作家たち、現代中国や韓国の美術など、同時代美術の展覧会を数多く開き、またV・ゴッホ、バルビゾン派、大英博物館展など、展覧会の範囲は広範です。このように当美術館の展覧会の方針は、日本を始め欧米、アジアなど世界の現代美術の動向の紹介、洋の東西を問わず歴史的な美術の検証のふたつを主軸に据えて現在まで維持しています。

### 中之島への移転と現在

開館から17年を経て、建物設備の老朽化、収蔵庫の狭隘化、足の便の悪さなどの条件が重なり、1994年に「新築移転基本構想策定委員会」が設置され、中之島の現在地への移転が具体的に検討され始めます。そして1999年に中之島新館の建築工事が開始され、2004年11月3日に新たな建物（シーザー・ペリ設計）で活動を再開しました。新館の地上には、帆を連想させるステンレスの巨大なモニュメントと入り口があるだけで、エントランス・ホール、展示室、収蔵庫、レストラン等はすべて地下という、当時は他に例を見ない美術館でした。

中之島新館の開館記念に「マルセル・デュシャンと20世紀美術」展が開かれました。

同展は、美術の根底的な変革を主導したデュシャンの仕事と欧米日本への彼の影響をたどるもので、当美術館の新たな出発に際して、改めて現代の美術に取り組む姿勢を表明することになりました。

中之島移転前後から現在に到るまで、美術を取り巻く環境と美術自体が大きな変化を続けていると言えるでしょう。20世紀末から急速に進展する情報化社会、民族紛争や難民問題といった様々な政治的課題の頻発といった社会状況は少なからず美術の領域にも影を投げ、ベルリンの壁崩壊以後強まるモダニズム批判、ポスト・コロニアル（植民地支配以後）と称されるアジアを含めた世界各地での歴史と現在への新たな検証などは、美術変革の直接の要因にもなりました。旧来の絵画彫刻の区分けは効力を失い、パフォーマンスやインスタレーションは当たり前のもとなつてその展開を多彩にし、美術概念の拡大はいよいよ激しく、われわれの生活にも侵入してきました。一定の普遍性を持った美術理念は消滅し、素材、方法、美術思想については豊かな多様性が許されています。こうした変動のなかで当美術館は、美術が本来持っているはずの高い精神性を救い出し守ることを忘れないまでも、今起きている新たな事象は何か、作家たちが何を考え、何が時代相をつくっているかを見極め、広く提示することが役割であると認識しています。

先に触れた、「日本を始め欧米、アジアなど世界の現代美術の動向の紹介」、「洋の東西を問わず歴史的な美術の検証」というふたつの方向を展覧会活動の主軸にしつつ、様々な形で企画される普及活動を同時に展開しながら、ますます中心が多化する現代の美術状況を見つめ、美術館活動の一層の活性化を目指しています。

#### 未来への一歩

40年が経過し、当初はジョアン・ミロの陶板大壁画《無垢の笑い》（1969年）1点であった当館のコレクションは、現在約8,000点を数えます。作品の収集方針を略述します。

- 1) 20世紀始めからの美術変革の歴史がたどれる西欧美術の重要な作品。
- 2) 20世紀後半から現代に到る日本の主要な美術作家の作品。
- 3) 日本の美術と関連する20世紀後半、および現代の海外作家の作品

以上、主に3つの方針をもって当館は、作品収集を続けてきました。こうした収集活動の結果、とくに20世紀後半の日本、欧米の「現代美術」に関しては、誇るべき充実したコレクションが形成されています。コレクションは、美術館の基礎体力です。展示、普及、調査研究などの美術館活動はそこから開始されます。アーカイブ資料も含めて、体力増強を常に心がけていかなければならないと考えています。

展覧会、普及事業については、今後もさらに地域に根ざし、社会との関係を深めていく必要があります。「現代美術」と先進的に取り組んでいると自負する当美術館は、これまでの方向性を粘り強く一貫させながらも、変貌を続ける現代の美術状況への丁寧な観察を怠らず、美術が贈り届けてくれる精神への刺激を掘り起こし、人々の生活を豊かにする一助となる事業を展開していこうと志しています。

開館40周年は、10年後の開館50年を射程に入れた、小さいながらも大事な節目とな

PRESS RELEASE

開館40周年記念展「トラベラー：まだ見ぬ地を踏むために」

ります。自らの足元を確かめ、未来に思いを馳せる格好の機会です。この時に当たって、当館のこれまでを見つめ直し、いまを探り、未来に眼差しを投げる記念展「トラベラー：まだ見ぬ地を踏むために」を開催し、また新たな一步を踏み出す確かな足がかりにしてい  
く所存です。

2017年10月15日

国立国際美術館長 山梨俊夫